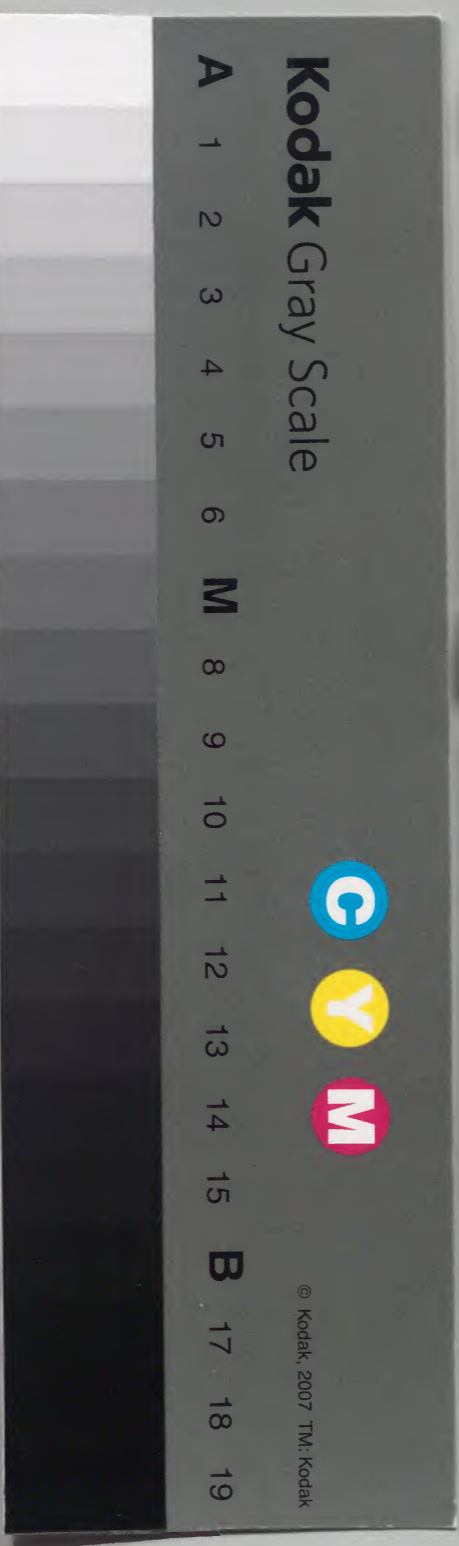
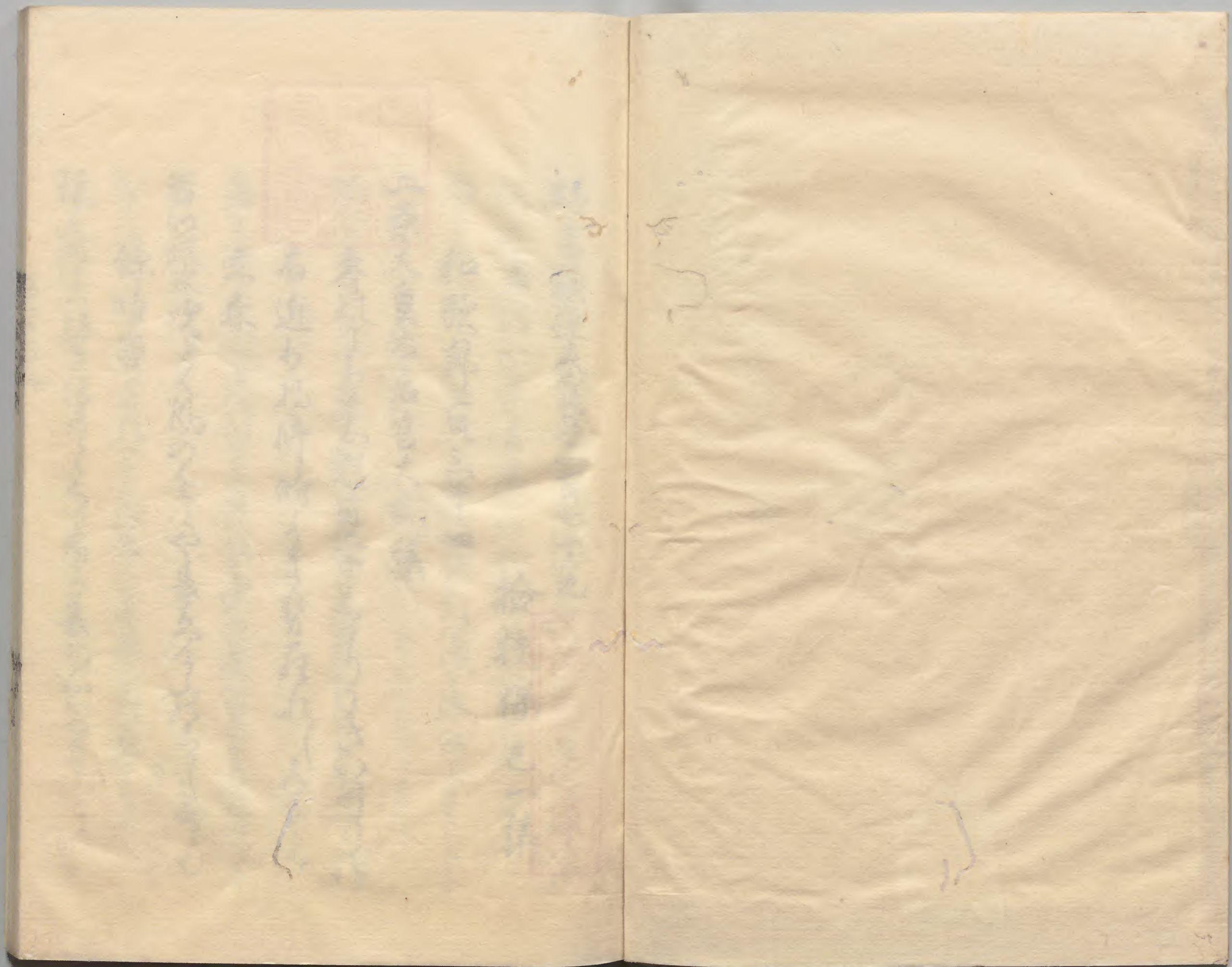


羣書類從

二百七十九

庫文閣内	
三	八
函	内閣文庫
番號	和 18690
冊數	666 (353)
架	函號 215 3





群書類後巻第二百七十九

浅草文库

檢校保巳一集

和歌部百之十四

二条大皇太后宮大貳集

年以うちあふ題百二十人ありて

右近少将師時より勢ありて

立春

春の氷吹く風のそよまをよむ

録時答

法人のまじりては

和歌部百之十四

時一花あれ意ししゆり里の採花ふんをうひや

山里は満りのうらに竹のうらふふく

井のうらふふくをうせいでくゆきて

竹の葉もいも後ちま志つのはま

あふふくをうせいでくゆきて

あふふくをうせいでくゆきて

見きくあはれは為よ風はうらふゆら

幸院ゆて花盛

はき葉はふくをうせいでくゆきて

赤山はふくをうせいでくゆきて

ふのふくをうせいでくゆきて

ふのふくをうせいでくゆきて

ふのふくをうせいでくゆきて

ふのふくをうせいでくゆきて

幸院にゆて

はき葉はふくをうせいでくゆきて

橋邊の葉はふくをうせいでくゆきて

ふのふくをうせいでくゆきて

かきす

あふふくをうせいでくゆきて

弘徽殿のふくをうせいでくゆきて

おほくちをうせいでくゆきて

源中納言

おもひしるをさゆりまたにと魚う下句

返

あめ月もふ後成るもまのくみもめを思ひ

にさし人かや一魚のむんしにわめて

くしをくさくさくくくくくくくくくく

乃さたぬれうさむじとつあゆの海うく

返事よおれをいづさむすくくあ

おもひしるをさゆりまたにと魚う下句

返

ちりすあふむきそあつあつ花をれに志つうよ

返見おあうくそく少物よ

君なるしまるい誰をうはうよ魚よさ見よゆうむ

返流れ花をさくそまゆり

おのをさるまうくうれの橋をうか指くううよあうす

返

おもひしるをさゆりまたにと魚う下句

仁和寺のいぶのさよるつうと花の夕人へ

のかつよるも舟うう見あしうう

女房れもさふ

免つゝくみらねのからう山嶽いづれのまじうも源

花みちとさうして、糸院の女房

あはれきりのおとらなをさびらるんさへおとあえ

返

あはれきりのおとらなをさびらるんさへおとあえ

申さるゝあいにし所より

さびらるゝ成りては揺るゝあはれきりのおとあえ

御うゝ

うねるゝあはれきりのおとらなをさびらるんさへおとあえ

花をさるゝあいにし所より

あはれきりのおとらなをさびらるんさへおとあえ

三月は

あはれきりのおとらなをさびらるんさへおとあえ

あはれきりのおとらなをさびらるんさへおとあえ

四月一日

あはれきりのおとらなをさびらるんさへおとあえ

あはれきりのおとらなをさびらるんさへおとあえ

あはれきりのおとらなをさびらるんさへおとあえ

あはれきりのおとらなをさびらるんさへおとあえ

あはれきりのおとらなをさびらるんさへおとあえ

あひあひ目久つれと夜の面よ事出さぬて

かみれ

如見みくらきうらうらきうらうら茶葉よほの葉まの

女院郁芳の孫あひせよ入かうくめりて

君の代のちうたあめよひひとてや省は葛蒲の根に

輝

夏山とさよむくものこあひたてしよとく小蝶の影也

夏ささゆりの目もいすあいつめきしきうよまうれて秋や葉

みさ月二あるとくねららの七日小

つ絲ものも歎やほろたあうさ遠は葉をさうらにありて

みる月あまの年むありのらう歎う目久らひぬら

みる月くく

ゆふとみあつさうらう今春よの春うさうこれ後を

すうめきさうらやとふ七日あきうあうら

ゆくあまよと人のりきあういよ

夏くつら夕小秋のみ風とせむれを候も待うか

七月七日は梅ゆきの葉よまつひ

たうらうにあつたあまゆきすいとらうてくよ君さまを

あせん良暹う十二よりの六十七よあつたよ年

しよまたあさよ後したるまのりしり
あをうせむぢらうもうのみせよしじ
あひしよ

たかろよんよせうりぬうさわいりもきあむりさ
まの橋

返

いんらんうきうつ海さふまうひかりの巻
ありと

うらふ七月七日
天永元か

雲りを待もろすう気ぬんふさめら月れうの
あひよ

萩

杖旁れきうのぶうせとて魚とけをりうけしきり
萩の錦し

うはき小萩もをうらなまうりて花の感也くれ

薄

あゝ萩のほひをけりもむすあまみゆり枝のたえらひ
小ぢり

那

あつこの儀まうす急来つげにゆりうきうの雲
ちうかけり

麻

あをこまのむじものたのい裏まひのぬら小男麻の

珍虫

杖とふさうあまのむらむらふにやうあつてあはれ虫の影

旁

胡をくまの夢にるる夢のいふれ鶴の名のゆへ

ふゆさくらのおくはたもそのせらるれおくらう

煉るれ心なせをもれ海も草の葉こそふ

復るまの煉の秋ふらう移るはして衣とてうら

あういふくまのしのおよ紅葉ひまをく

あういふくまのしのおよ紅葉ひまをく

あういふくまのしのおよ紅葉ひまをく

あういふくまのしのおよ紅葉ひまをく

あういふくまのしのおよ紅葉ひまをく

あういふくまのしのおよ紅葉ひまをく

あういふくまのしのおよ紅葉ひまをく

くれぬる成たりと云んぬる人のしりぬり
 當ぬきと年の中くくもるむとあるに哉
 幸院も人々集りて松の葉水よき
 けりてあまもせむるひよ
 七葉あつちの梅の松の葉水よき
 心よあつちの心よ
 神風も吹くくもる花すま君よき
 一目くもる花すま君よき
 みねつきけいふ松の枝とふちとせを繋る君の代
 志近申物かき一町よわく進もい

九月つてもまれひまされ
 いのちあつちの心よあつちの心よ
 下るに君くもる花すま君よき
 心よの思もてしとあつち
 かねてけりもあつちの心よあつち
 けりてあつちの心よあつち
 七月七なぬくぬく
 あつちの心よあつちの心よ
 赤院もくかき一町よわく進もい

夏の夜の戀をとりて

あつむける恋れ煙よ夏の夜に山後をたねと恋つた心

お合をせとせ給んんと勢しくおのり

恋うけ人ごううは事あられ山後しも恋らん

人ゆふひふ夏夜の恋のこゝろ

ささけなきうらなう夏夜の恋の恋しきうらな

み院よんかう志むの秋春のよれ月

兼代を慕うとひく志先ぬらふむねの恋けあゝあ

兼の月よと

と宗よあつらふここのあきとふ秋のよの月

八月十の夜

月影のあつらふ山つまの秋のあつらふ照ほさる

月乃あつらふ秋源中納言

み無もわらふあき照すらん月れ先よわらんわれ

うら

たつ孫らんもまると月うきあつらけよあな

あつ院の人いつをねて月なすとも

あつとらうらん八月廿日よひの

月出しのら源中納言よう

あつ又もあつ月成あつらつ旅のうらあつら

いづくもねんせむ所とるぬこし
 しこひい魚よ福しときくしう
 月あきねたあねあふくしう
 くらとてさしうね魚よあしあ
 よもむむさうたうらふねひのる
 ある山里に伯の康資とあてあてな
 春の月いつら後
 いづもいづのあふくしう
 何みそとあねあふくしう
 をあすとのあふくしう

いづもいづのあふくしう
 いづらの月ふとねたあねあふくしう
 といは十月くらうれ風うらぬ
 つくもあふくしう
 丁哉君もさしう
 我もあふくしう
 ちひまはさしう
 色をさしう
 いらねあふくしう
 こそあふくしう
 いづもいづのあふくしう

あつらひのきりぎりすのさけ

あつらひのきりぎりすのさけ

あつらひのきりぎりすのさけ

あつらひのきりぎりすのさけ

あつらひのきりぎりすのさけ

あつらひのきりぎりすのさけ

あつらひのきりぎりすのさけ

あつらひのきりぎりすのさけ

あつらひのきりぎりすのさけ

あつらひのきりぎりすのさけ

楊貴妃

君とわれとの世の化の後まじり

あつらひのきりぎりすのさけ

道の上の引もなきはなもなき

淡くしよ林の夜つらきまはら

株をせよ花をなれははの玉う

星合よりきて驚くは紫のあは

ひらねの床をさうまふれつ種

后

はの床に驚くは成意す玉のこ

道は魚小終りくまろをなれ

はひきる浪は魚をよすがうの

あつらひのきりぎりすのさけ

かげさうしき 雲合れし 霞のちうつたさくく 霞のち
 秘院よまらるる 霞のちうつたさくく 霞のち
 にかゆらに 霞のちうつたさくく 霞のち
 ちほふとあつたれ 霞のちうつたさくく 霞のち
 う色

たぢさく 歎もろくの 穉らば 霞のちうつたさくく 霞のち
 身をもたれ 霞のちうつたさくく 霞のち
 るあめとほま 霞のちうつたさくく 霞のち

近

目のかれす 霞のちうつたさくく 霞のち
 目か

と

とあつた 霞のちうつたさくく 霞のち
 久

近

うもろく 霞のちうつたさくく 霞のち
 何

いさあ 霞のちうつたさくく 霞のち
 霞のちうつたさくく 霞のち
 あつた 霞のちうつたさくく 霞のち

かくらううんをもちてあらうあつてき
 わ中ありしを人のこころにほり
 杖袖あらうはゆめもきこらうひまこころ
 後拾遺きこらうきこらうあきん集をり
 うよのちかきしやうこころやうこころ
 心めかあかき
 まいあきしやうこころいんあきあき
 五
 いそふ同もきこらうあきあき
 う
 名よあきこころのまのきこらうあきあき

源中相玄くあきあき

鳥あきあき

神のますゆはきこらうあきあき

あきあき

くうらう

あきあき

くうらう

くうらう

あきあき

弘嚴殿のやうあきあき

こころねめきの集うらねとて

東のこころねつものまゝむじとの紫を思計し世よちかめ

近しつたうつかの掌おのころぬ

東のかふさむつこころねつもの紫の風よねもさうせと

まのよふもさうせとらねく伯れ母のころ

まのよふとさうせとらねく伯れ母のころ

今うらまゐあめれからと省くむじとむすは梅君

長し伯ねく君

と娘うねゆのころ草垣しうまらうれをわすま

うらと近し

何すもさうせとさうせと橋人さうせとれ寺ねらま

ねらう人さうせとさうせとさうせとれを思て

狂不流けの紫とさうせとむすは法成めりま

敵の肥後の君と急のあつ月小せあま

かーととま

暁もさうせとさうせとさうせとさうせとさうせと

人ねらふさうせとさうせとさうせとさうせと

すさうとさうせとさうせとさうせと

まのよふとさうせとさうせと

誰うみさうせとさうせとの人の魂ねらま

人のくつさつきりし所おれ棒物物化つて
清くは昔人のまもひよおのころをさう

新院今うらなはれり鳥羽院はゆきよ
いとさあせおのころはよ人く系りて

くくくくくくくくくくくくくくくく
高人うたんとせおくくくくくく

はるひおのころくくくくくくくく
梅せとやうなる人まもるくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくく
ゆせとやうなる人まもるくくくく

半院おれくくくくくくくくくく
系りて琴ひきはわうひくくくく

夜まのころくくくくくくくくくく
友よはわうくくくくくくくくくく

近くはたおのころくくくくくく
琴は昔人のまもるくくくくくく

あうりはくくくくくくくくくく
みくくくくくくくくくくくく

みくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくく

ねづみのね比のやも白糸や流ひうめくるきとらうむ
く人のあつしつるが成らけりまをらふとら
あつしつ

ひりきとあひ終すうけりたも粒数おれおる
ある所にうらむはる集つとも月影を

言これ埋まひりての成とも年の平あつてあす

あつしつ
あつしつ

あつしつあつしつあつしつあつしつあつしつ

あつしつあつしつあつしつあつしつあつしつ

あつしつあつしつあつしつあつしつあつしつ

あつしつあつしつあつしつあつしつあつしつ

あつしつあつしつあつしつあつしつあつしつ

あつしつあつしつあつしつあつしつあつしつ

あつしつあつしつあつしつあつしつあつしつ

あつしつあつしつあつしつあつしつあつしつ

あつしつあつしつあつしつあつしつあつしつ

あつしつあつしつあつしつあつしつあつしつ

あつしつあつしつあつしつあつしつあつしつ

あつしつあつしつあつしつあつしつあつしつ

あつしつあつしつあつしつあつしつあつしつ

すまねうも

風ふあまをあらはしむ枝かえはれけうけうをのれ
くれうひ

きしひうけうけうけうけうけうけうけうけうけうけう

うけひう

小山ふきうけうけうけうけうけうけうけうけうけう

うせ

うれす

うらたうけうけうけうけうけうけうけうけうけう

うらたうけうけうけうけうけうけうけうけうけう

うらたうけうけうけうけうけうけうけうけうけう

うらたうけうけう

うらたうけうけうけうけうけうけうけうけうけう

うらたうけうけうけうけうけうけうけうけうけう

うらたうけうけうけうけうけうけうけうけうけう

うらたうけうけう

うらたうけうけう

うらたうけうけう

うらたうけうけう

うらたうけうけう

うらたうけうけう

已上百九拾七首

化人等

大貳

大宰大貳高階成章女
母大貳三位

成章

春云亮葉遠男
母施葉院使紀彦平女

康平元年正月七日 正三位

同二月十六日 薨于任所

右宰大貳
年六十九

二條右皇太后

皇子

白河院御女

御母中女皇子

寛治二年六月廿八日

十定

四年四月十日

入紫野院

承德二年六月廿一日

退之依御所

嘉承二年十二月一日

為皇太后

天皇即位日 唯母儀

長承二年二月十九日

及皇太后

為右皇太后

大治四年七月廿六日

為鏡

天養元年四月廿百

崩于二条塔川第

御年宗七

天養元年四月廿百

御年宗七

天養元年四月廿百

天養元年四月廿百

御年宗七

天養元年四月廿百

御年宗七

天養元年四月廿百

御年宗七

天養元年四月廿百

御年宗七

天養元年四月廿百

御年宗七

天養元年四月廿百

御年宗七

待賢門院堀河集

山陰のまきをたきもたきむらさきむらさきむらさきむらさき

山陰のまきをたきもたきむらさきむらさきむらさきむらさき

むらさき

山陰のまきをたきもたきむらさきむらさきむらさきむらさき

むらさき

山陰のまきをたきもたきむらさきむらさきむらさきむらさき

むらさき

山陰のまきをたきもたきむらさきむらさきむらさきむらさき

山陰のまきをたきもたきむらさきむらさきむらさきむらさき